

企業美の諸相

センスウェアの在り処と影響力

佐藤好彦

株式会社クイントセンス 代表取締役社長

05. 切実な問題と誠実な解決策

「なにもなにも、ちひさきものはみなうつくし」^{*1}。この一文に象徴されるように、昔から日本人には「小ささ、弱さ、細やかさ」などを慈しみ愛でる精神性や美意識が備わっているようだ。日本人の考え方や発想の仕方、感覚の表現を、もともと話し言葉であった「やまと言葉」の意味や言葉遣いを参照しながら考えてみたい。

その理由は、2005年に開発されたテルモの「痛くない注射針：ナノパス 33」を、問題解決の営みである「デザイン」で捉え、誠実な解決策として讀みたいからだ^{*2}。

何のためのデザインか、誰のためのデザインか

注射は痛い。ほぼすべての人は物心がついたころから、定期的な予防接種や治療で経験する注射を嫌なことだと記憶しているだろう。我慢できないほどの激痛ではなくとも避けられるのならそうしたいはずだ。

しかし、一日に数回もインスリンの注射を自ら打たなければならない糖尿病患者が日本には100万人もいるらしい^{*3}。病状に程度の違いはあるにせよ、生命に関わる必要なホルモンの補充だから、患者にとって注射は習慣であり日常行為なのだ。身体的・精神的苦痛を意識する毎日はつらいだろうと察することしか健常者にはできない。

そう考えると、「どうせ」逃れられない注射の苦痛を、「せめて」わずかでも軽減してほしいと願う患者の気持ちは切実だ^{*4}。

予防に優る治療はなく、インスリン注射に代わる根治療法のない現在、対症療法として自己注射の苦痛を軽減することの意味は大きい。患者のQOL:Quality of Lifeの向上は、何よりもまず日常生活の質的改善の成果に影響されるはずだ。

注射を打つコトによる身体の痛みが、それを避けたい、そこから逃げたいという精神的な苦しみを招いているのは間違いない。したがって、身体的苦痛の軽減が精神的苦痛の緩和につながるだろう。そのためには、「注射を打つコトの痛み」の原因である「注射針というモノ」の革新が、切実な願いを誠実に受け止める最適解であり、誠実な解決策だったのだ。

開発当時、世界で最も細いと謳われた注射針の直径は0.2mm、このイノベーションが「注射は痛い」という常識を覆したのだ^{*5}。

医療器具は、その性質からしてさまざまなモノの中でも他と一線を画すといえるだろう。それはデザイン方針にも明らかな違いとなって表れている。例えば、自動車やAV機器などは、そこに何らかの問題解決が図られるにせよ、趣味的の強いこだわりを反映した楽しみや欲びの享受を求められる。また、生活家電は便利や効率の追求など、どちらも現状の程度を「もっと強める」方向性が求められる。

しかし、医療器具は必要かつ使用する人々に何らかの不自由や苦痛を強いるため、それを「もっと弱める・取り除く」意図でデザインされるべきものだ。患者という弱者のより良い日常性の獲得に貢献することは、医療器具という産業分野でわが国が国際競争力を発揮するためにも大きな意義があるはずだ^{*6}。

^{*1} 清少納言「枕草子」第151段。現代語訳は「何もかも、小さいものはみなかわいらしい」。

^{*2} 「グッドデザイン賞」は1957年に通商産業省（現・経済産業省）によって創設された、わが国で唯一の総合的なデザイン評価・推奨の制度。1998年度より、公益財団法人日本デザイン振興会が運営母体。<http://www.g-mark.org/> 参照。デザインとして捉えられる領域や対象は、意匠権の範囲を大きく超えている。ナノパス33は、2005年度のグッドデザイン大賞を受賞している。<http://archive.g-mark.org/2005/grand-kouho/05A10039.html> 参照。1998年度の民営化以降、最も小さく、軽く、簡素な構造で、安価な大賞受賞アイテム。審査委員のコメントにあるとおり、これを偉業と評価した日本のデザイン界の見識も素晴らしい。

^{*3} この注射針は、現在ナノパス34に進化し、さらに痛みを軽減する直径0.18mmを実現している。http://www.terumo.co.jp/medical/products/07_tounyou/tounyou_05.html 参照。<http://www.terumo.co.jp/pressrelease/detail/20120830/37> 参照。

^{*4} 「どうせ」とは、副詞「どう」に動詞「す」の命令形「せよ」の音変化から、経過がどうであろうと、いずれにしても、結果は明らかだと認める気持ちを表す。あきらめや、すてばちな気持ちを表す語。所詮、日本人の無常観がよく表れる言葉であり、「どうせ」に続く言葉は必ず消極的・否定的である。「どうせ上手くはいかない」「どうせ負ける」「どうせ散ってしまう」である。そして、「どうせ負けるのだ、いっそやめてしまえ」という流れと、「どうせ負けても、せめて1点は取りたい」という展開がある。「せめて」は動詞「貫む」の連用形に助詞「て」の付いたもの。少なくとも、これだけはという最低限の願望を表す、痛切・切実な気持ちだ。

^{*5} *3と同じ。皮膚の表面にある、痛みを感じる痛点の分布は1cmに100～200個ある。針を細くすると痛点を避けることができ、痛みの知覚が軽減する。

^{*6} <http://www.terumo.co.jp/press-release/2011/045.html> 参照。2011年10月のプレスリリースで中国全土での販売開始を発表。ナノパス33の累計販売本数は5億本とある。

^{*7} 「はかない」とは、「はか」が「ない」であり、「はか」は「はかどる」「はかがいく」の「はか」で、「はかない」は結果が得られない、手応えがないの意が基本。そこから、束の間であつけない、空しい、見通しははっきりしない、甲斐がない、無駄。取るに足りない、未熟、愚かというように、何かしら「はかれない（計算できない）」という不完全さを受容する感受性だ。完治しないといわれる病のはかなさに寄り添うデザインは美しい。

やさしさが「優しさと易しさ」に結実し、「あはれ・うつくし」になる

「やさしさ」とは、「他人への思いやりがあり、細やかな情があること」であり、人の苦しみやつらさに敏感な感情だろう。やまと言葉の「やさし」は「瘦せ」と同根の「身が瘦せ細るような思い、引け目を感じる、恥ずかしい」が原義だ。中世以降、瘦せ細るように恥ずかしいゆえに、「控えめ、慎ましい、繊細、上品、優美、殊勝、温和など」の意味を持つようになった。

技術より先に思いやりがなければ「痛くない注射針」の発想は生まれない。これは問題解決、つまりデザインにはこの感情が起動させる想像力の豊かさが不可欠であることの証しだろう。そして優しさの共感・共有が、モノづくりの限界に挑戦する技術屋の職人魂を播きぶつたに違いない。

遂に出来上がった注射針は、驚くほど痛くなかったらしい。痛みを感じなければ精神的な苦痛も緩和される。この注射針を装着した注射器は「取り扱いの容易さ」以上に、使うことの抵抗感の払拭による「動機としての使い易さ」というベネフィットを与えることに成功したのだ。

このように、デザインという問題解決思考が方向づけ実践を主導するモノづくりの現場には、デザインと技術の双方に驚くほどの挑戦意欲と、溢れんばかりの感動があるのではなからうか。そのような状況を讀める言葉に「あはれ（あわれ）」がある。元来の語義には、「尊い、立派、いとしい、情緒深い」など、感嘆賞美の場面に用いられる意味もあるが、今日では「気の毒、悲しい、みじめだ」という哀傷の場面に用いる意味に限定されてしまった。

しかし、患者を気の毒だと思いやる優しさは尊く気品のある様であり立派だ。そして、常識を覆すモノづくりも同じように立派であるに違いない。ここに、気の毒、かわいそう、哀れなという感情が、実は尊く立派な成果と根を一つにしていることが分かるだろう。

万葉集に一番多く詠まれている花は「萩」だ。小さな花が密集している様がどうして好まれたのだろうか。さらに日本人は細かい粒が房のように連なる「藤」の花も好きだし、春には尋常ならざる思いを寄せる「桜」の花も同じように小さく細かいではないか。

「うつくし」のやまと言葉は「美し、愛し」の意であり、それは他方で「くはし（くわし）」の音がある。それは「細し、美し」と表意されるように、元来、我々には「繊細なものの、微細なもの」を美しいと愛でる精神性・価値観・センスウェアが宿っていることは疑いようがない。かつて世界を席巻し、Made in Japanと賞讃された技術が、「軽薄短小」に実を結んだ所以だ。

今こそ、長い歴史に培われた文化を産業資源として見直すべきだろう。弱さのデザインは、思いやりの気持ちをかたちにするから、おのずといのちに寄り添えるといえよう。愛でることは美しいこと、美しいから愛おしくなる。冒頭に引用した一文は小さいものへの愛着、愛情のこと。可愛いと発せられるのは「愛でられる可能性の顕在化」だ。誠実な注射針は、はかなくも可愛いと断言できる^{*7}。